

# 『戦後台湾俳句小史』（七） 第四期（成熟期）から第五期（転換期）に かけての台北俳句会

——会長黄靈芝の選句・句評とその消滅

磯 田 一 雄

はじめに 第四期（成熟期）と第五期（転換期）の台北俳句会

台北俳句会の第四期（成熟期）は既述のように、『台北俳句集』の第30集と『台湾俳句歳時記』が刊行された2003年から第39集の刊行された2012年までとする。この時期には、創立三十五周年記念（2005年7月）と、創立四十周年記念（2010年12月）という二つの記念句会が開かれている。三十五周年にはあまり大きな行事はなかったが、『黄靈芝作品集 21』（2008年）はこの年の句評に基づいている。四十周年には記念句集も刊行され、来賓も多く大きな行事となった。これらの行事を契機に、『台北俳句集』への日本人の参加（日本からの欠席投句者）が、第33集以後増えている。このほか、在台日本人の参加も増えている。

日本からの投句者数（賛助出詠の羽田岳水と福島せいぎは含まず）  
第30集（03年6月）2名、第31集（03年8月）2名、第32集（05年7月）3名、第33集（06年7月）4名、第34集（07年9月）4名、第35集（08年3月）6名、第36集（09年5月）6名、第37集（11年9月）6名、第38集（12年4月）6名、第39集（12年8月）6名、第41集～43集（15年7月）4名、第44集（17年2月）7名  
『創立40周年記念集』（2012年12月）は第一部（賛助出詠2名を含む現役会員）52名、第二部（旧会員及び逝去会員）104名、第三部（加藤山椒魚を含む一時的参加者）35名と、基準が違うので日本から

の投句者数は省略する。

この成熟期は台北俳句会会長・黄霊芝にとって、一番幸福な時期だったかもしれない。著作としては、第三期の末（2001年）に「小説集としては初の刊行」である『黄霊芝作品集 19』を刊行して以後、2003年には『台湾俳句歳時記』のほかに、『黄霊芝作品集 20・蟬三百句』、2008年に『黄霊芝作品集 21・論集「年々…月々…」』を刊行している。前者は蟬を詠んだ俳句のみ400句以上を収録しており、後者は2005年度の俳句会の句評に手を入れたものである。短歌や川柳とも縁遠くなり、俳句以外の著作や論文はもはや発表していない。黄霊芝にとって第四期はまさに「俳句の季節」であった。黄霊芝は春燈や燕巢などの日本の俳句会に対しては、自立を守り、あくまで台北俳句会のためになるような行動をとってきた。台湾俳句もようやく少しずつ世に知られて、会長としての評価も高まってきた時期であった。

『台北俳句集』は第39集刊行後、3年置いて第41集～43集が2015年7月に一括刊行されるのだが、第五期（転換期）は2013年以降と見るべきであろう。それはこの頃から台北俳句会の月例会運営における黄霊芝のかかわり方が大きく変わって来るからである。既に台北俳句集の編集は会員に大幅に任せるようになっていたけれども、黄霊芝あつての台北俳句会、台北俳句会あつての黄霊芝であったから、毎月の例会の運営との関わりの変化は大きな出来事といってよい。そして2016年3月黄霊芝の逝去に至るのである。

## 1. 『句集・蟬三〇〇句』——黄霊芝唯一の俳句集

第四期の初め、『台湾俳句歳時記』の半年余り遅れて2003年12月に刊行された『黄霊芝作品集 20』は、標題は「詩集」であるが、実体は「句集・蟬三〇〇句」で、彼が生涯に出した唯一の俳句集である。実際に収録されているのは444句であるが、序の句と跋の句を入れると446句になる。黄霊芝はそれまで30年以上も台北俳句会の主宰（名称は会長）として、指導的俳人でありながら、第三期末までに出された彼の俳句集は、詩集や短歌集と合同の句集と、姉の陳阿嬌との合同句集『候鳥（阿嬌）・霊芝（天驥）合同俳句集』（1984年）だけで、単独の俳句集を

出していなかったのである。この句集は私家版でもあり、『台湾俳句歳時記』の陰に隠れて目立たぬ存在だが、この期の黄靈芝の俳句観をうかがい知るには欠かせない。

『蟬三〇〇句』は蟬を通じて生と死の世界を詠んだものである。序の句「初蟬を聞き洩らすことなかりけり」があって、蟬の生れ出るさまざまな光景を詠むことから始まり、最後は蟬の死を描き、「いつやらんいつより蟬のみずなりし」という跋の句で終る。

ある俳誌は次のような句を引いて、「これほど蟬を観察した俳人はいないであろうと思われる程蟬のさまざまな生態が描かれている。それは人間への深い洞察力と重なって数多くの内観句が読み手をひきつけて止まない一集となっている」と評している<sup>1)</sup>。

蟬去りてどこかに多き落し物  
手に蟬を握るは命握りけり  
爪先も蟬竿のうち伸びきつて  
老いの手はしがみやすけり蝸蟬  
空蟬の背に陣痛の走り傷  
蟬の穴見ては誰彼木を仰ぐ  
ひめひぐらし鳴かせて古都の深庇  
一代一代蟬の来てをり終戦日

季語は単独の蟬が圧倒的に多いが、初蟬、地蟬、蝸蟬、今年蟬、赤子蟬、片端蟬、誕生蟬、草蟬、啞蟬、地墜蟬、蟬の末、死蟬、武蔵蟬（宮本武蔵を連想して）、セミートピア（蟬の楽園の意味か）、蟬葎、蟬株、蟬麻呂朝臣、社蟬、蟬日和、迎蟬、蟬ヶ岳など、中には季語とは言えないような造語もある。一方台湾季語としての蟬は羽衣蟬などわずか3語で、これらを詠みこんだ句も10句ほどしかない。台湾的なものを超えて、普遍的なものを目指したということであろうか。

さらにこの句集で注目すべきは、5・7・5の定型を離れた自由律のような句や、一字空けの句、またわずかだが、黄靈芝の発案による漢語句「湾俳」に似た漢字句（純粋な湾俳ではなく日本語で読める句）も混ざっていて、形式的にも多様である。これらは「戦後台湾俳句小史（四）」で紹介した、第二期の黄靈芝のそれを思わせる<sup>2)</sup>。また「史記」

や「奥の細道」などをもじった句もある。

まっさらの蟬 電池まっさら  
ダリの髭 蟬の脚 巫  
沈黙は金 蟬は好き  
初蟬に、雨、雨、雨、雨  
鳴いて止み鳴いて止み蟬の柚道  
山々に蟬 蟬々に山  
出勤のラッシュ 頭上は蟬ラッシュ  
万緑裡 蟬テナー  
蟬滂沱 敗将墓  
風見雞 蟬聴耳 少年歩哨兵  
蟬飛ぶや壮士一たび往きて還らず  
岩ありて蟬みて芭蕉どこかにみ  
蟬聞こゆ「山のあなたの空遠く」

蟬を主題とするのは、黄霊芝の一時の思い付きではない。『黄霊芝作品集 2』（1971年）には「蟬」という詩が二篇あったが、『黄霊芝作品集 6』（1982年）では、「蟬（一）」～「蟬（八）」という詩の連作となり、「生まれたての蟬」から「蟬の臨終」までを詠んでいた。『句集・蟬三〇〇句』は、それをさらに拡大発展させて、俳句による一大交響詩としたのであり、蟬は黄霊芝の生死観を代表する表現の対象となったと見られる。その中には人間との交流も多々含まれている。

飼へば死ぬどうせ蟬とて要らずなり  
掴まへし宝の蟬を手に夕餉

## 2. 成熟期の台北俳句会を代表する句会

### (1) 黄霊芝と羽田岳水の選句の違い——2003年12月句会——

2003年12月の句会の句会は、燕巢俳句会の主宰・羽田岳水が同人の定方幸子と参加していた。黄霊芝による選句と羽田岳水による選句とを

対比できる点で興味がある。もっとも二人の選句の仕方はかなり対照的である。羽田岳水は句会の席上会員と一緒に選句をしているのだが、黄靈芝は句会に欠席する場合と同じように、会場に来る前に既に選句を済ませているのである。黄靈芝と羽田岳水とでは、選句条件が違っていることにまず留意したい。参考までに互選の得点も記しておくが、ある会員は「互選の点よりも、やはり黄靈芝先生に選んで頂く方がうれしいですよね」と言っている。

2003年12月14日句会（欠席投句を含め投句者59人） 黄靈芝・羽田岳水出席、\*印台湾季語、福島せいぎ欠席投句

黄靈芝選 12句（掲載順）	作者	互選得点
千年の木々をそびらに山眠る	楊海瑞	0点
初時雨意外な人と二人傘	文錫煙	1点
着せ替えていのち漲る菊人形	葉七五三江	6点
水鳥のもう来ぬ池の広さかな	藤原若菜	3点
埒明かぬ夫婦喧嘩や焼肉粽*	楊瑞麟	0点
血眼に孫探したる夜市*かな	高阿香	2点
デパートに立ちて仰ぐや聖誕樹	張煊焮	1点
会話絶ゆる車窓何時しか冬の海	黄葉	2点
法要の集ひに混じる冬の蠅	定方幸子	2点
手を弛めハンドル戻す十二月	董昭輝	0点
冬日向いかつく銅像ただの顔	呉文宗	0点
百年の母校は青き冬の椰子*	周月坡	1点

羽田岳水選 5句（掲載順）	作者	互選得点
耳 <sup>マ</sup> なりの耳に入り来る除夜の鐘	陳火桐	3点
雲海を見る阿里山の木の根っこ	施碧霞	1点
リス <sup>パラ</sup> 食みし芭 <sup>ラ</sup> 楽*や台湾遥かなる	林美	1点
これよりは母の居ぬ里寒雀	徐奇芬	7点
冬日向子の香薄らぐ蒲団干す	高宝雪	1点

互選最高点句：徐奇芬入選句（7点）、次点句：葉七五三江入選句

(6点)

これによって黄霊芝と羽田岳水の選句の基準の違いがかなり明瞭になったのではないと思われる。一口に言って黄霊芝が句の「ドラマ性・意外性」を重んじているのに、羽田岳水は「渋み・無常性」を重んじているかのように見える。台湾という共通項があったとはいえ、二人の句観はかなり対照的だったのではないか。

(2) 創立40周年記念句会(2010年12月12日、台北・国王大飯店)

黄霊芝選(選句紙掲載順)	作者	互選得点
お開きはいつもの軍歌年忘れ	増田信雄	4点
刈り取りて皺手に重き晩稲かな	廖 運藩	2点
山羊の声しきりにひびく牧小春	楊 海瑞	3点
流れ星飛んで音なき闇の空	林 美華	1点
国境の無言の警備冬銀河	董 昭輝	4点
極月の線香太し関帝廟	磯田一雄	6点
網棚のクリスマスケーキやや斜め	黄 媒花	1点
カンバスに色のくさぐさ紅葉散る	呉 文宗	2点
石燈籠碑銘の昭和黒ずみぬ	呉 文宗	2点
父よりも長寿を享けて冬帽子	呉 文宗	2点
気にかかる国の行く末遠花火	高 阿香	1点
澄む水に孤独の顔の浮き沈み	高 宝雪	4点
まず灯る花屋の色や聖誕紅	三宅節子	1点
山茶花やピピピと鳴るは洗濯機	三宅節子	0点
どぶろくに建前すぐにくずれたる	鳥羽田重直	2点
大根の撫で肩さらす畑の風	唐沢まち	1点
月冴えてマンモスの骨歌ひ出す	唐沢まち	0点
寝たふりの猫の薄目や日向ぼこ	唐沢まち	5点
逢曳の何時もの場所は末枯れて	劉 竹村	1点
銀髪の波ゆるやかに菊花展	周 月坡	0点
初親となりし婿にも麻油鶏*	周 月坡	1点

黄霊芝の採らなかった互選の高点句

看護師の脈取る指の暖かし	増田信雄	7点互選最高点句
杖を突く老いの笑顔や小春径	李 錦上	5点
百歳は夢にあらずとすっぽん鍋*	高 阿香	4点
背伸びして秋の空見る池の亀	高 宝雪	4点
背を屈む恩師いたまし寒の月	徐 奇芬	4点

「台湾俳句らしい」句——台湾季語を詠みこんだような句は多くないことがわかる。(六)で見たように、台湾季語句を詠みこんだ句はなかなか秀句にされないのである。ここに挙げた句のうち「台湾季語」で詠んだ句は、「すっぽん鍋」と「麻油鶏」のみである。それに対して、台湾らしい景物を詠んだ句は、「関帝廟」のみである。この句会に投句された他の句には、台湾季語として「ぼんかん」「周年慶」「臭豆腐」「ザボン」、台湾風景として「観音山」「大屯山」を詠んだ句がそれぞれ一句ずつある。これは(六)で指摘した、兼題に出された台湾季語句が秀句とされる率が、一般の季語の句より低い傾向とも合致するようである。

### 3. 句会報に添えられた「今月の句」による黄靈芝の句評 ——2003年10月句会

次に句評を見よう。俳句会の主宰は句会に毎回出席して選句をしたり句評をしたり投句に手を入れたりするのが原則であろう。これに対して黄靈芝は、この第四期のころは体調のすぐれないこともあって句会への出席がほとんどなく、出席してもその場で批評し指導するようなことはしなかった。しかし実質的な指導はそれなりにされていた。句会の席上で参加者による選句が終わった直後配布される「今月の句について」という手書きのプリントに書かれた句評がそれである。ただし黄靈芝は、選句は毎月行っていたものの、句評は時に出ない月があり、半年くらい出なかった時期もあった。

既に指摘したことであるが、黄靈芝は句会では殆んど発言せず、句の批評もしてくれない。意見をいう時はプリントですと会員が証言している。この点について黄靈芝は次のように言っている<sup>3)</sup>。

人は概ね「喋る」型と「考える」型に分けられるらしい。むろん喋

る人が考えないわけではなく、考える人が喋らないわけでもないが、得手が違う。(中略) 生来、人前に出ると唾になってしまう赤面家の私は、血相を変えない限りあまり喋れない。賞めた性分ではないが持って生まれた難症は治癒しがたく、勢い鉛筆を数本持って物を考えがちである。こうしていつよりか、台北俳句会の年間合同句集の「あとがき」に私見としての小論を、一篇ずつ収める習慣となった。

「句会で作者に向かって句について喋らないのは、性分だから仕方がない。これで勘弁してほしい」ということになろう。まして句会に欠席するようになれば、そうする以外に仕方がなかったということもあるだろう。通常の句会の席上口頭でなされる句評は、一句ごとの評言は概して簡潔であり、記録に留まらないこともある。それに対してこの書面による句評は、黄靈芝台北俳句会員との相互関係の中で形成されつつある俳句観の動向を、現在進行形の形で示した第一次資料といえよう。

最初に○の句の優れた点を批評している場合と、X(選ばなかった句)の問題点を指摘している場合との割合を見てみよう。筆者はたまたま2003年10月からしばらく在台したが、間もなく黄靈芝に紹介されて、台北俳句会に入会し、翌11月から句会に出席するようになった。したがってそれ以前の句評の状況は分らないが、この10月句会の句評は、最初にこう書かれている。

今月は私なりによいと思った句を挙げてみます。ただしケチもつけます。癪だから、と思わば思っても結構です。が、怒ったら殴るゾ。

そう言って、○にした全26句を評している。一人で2句、中には3句全部が○になった人もいた。ふつう句会では佳句を中心に批評することが多いし、この時の句評は、ところどころに黄靈芝一流のギャグが入るものの、全体としてオーソドックスな句評だと言っていい。B4の用紙3枚に上下二段で丁寧に自筆で書き込まれたもので、かなりの時間と労力を要したであろうと想像される。



2003年10月句会の句評は、その後の句評と大きく異なっているので、まずこの句会での○となった句（秀句）を一覧して見よう（黄靈芝は●を用いたが、ここでは○にしておく。点数は互選の得点）。

○になった句	作者	互選得点
専門は燃烧技術餅を焼く	陳火桐	3点
いわし雲倅は放浪癖持てり	陳火桐	0点
仲良しの象牙の箸や秋に入る	李錦上	0点
遷廠の門かたく閉め鶏頭花	李錦上	2点
二人して火星見る夜のほたるかな	張継昭	2点
盂蘭盆や火花散らして市電來る	張継昭	0点
梅漬けて無敵の母となりにけり <sup>4)</sup>	李秀恵	4点
黄落や女唇を濃くひけり	呉文宗	1点
菊活ける家元の声慎ましき	游細幼	1点
サングラス散歩と言ふに車椅子	陳宝玉	1点
錦絵の瓜実顔や秋扇	葉七五三江	3点
昨夜逝きし人とは知らず柿土産 <sup>よべ</sup>	黄 葉	5点
はらはらはらエアメールより紅葉散る	黄 葉	2点
メルヘンをこわして人の月に立つ	張清瑛	1点
菊の宴満艦飾夫人を上席に	北條千鶴子	2点
萬燈をきらめかせ風ぐ秋の川	陳蘭美	2点
夏木立すつくと大地をわしづかみ	陳蘭美	5点
夏帽の白ちかちかと峠道	鄭清治	1点
炎天下車椅子押しデモ行進	林 美	0点
江戸切子灯にかざしつ新酒酌む	藤原若菜	0点
礎棧の幾世を古りし苔の露	廖運藩	0点
夢に笑む稚児の眠りや鐘叩	廖運藩	5点
冬ざれの名園に人振り向かず	楊海瑞	0点
天高しカレーライス <sup>の</sup> 黄の幟	陳錫恭	1点
夜食くふ和漢洋台目茶苦茶煮	陳錫恭	1点
秋ついで山なみ遠く続きけり	今井祥子	0点

この月の句会は全体として句の出来がよかったのではないか。それで黄靈芝も○の句ばかり選んで句評をしたのかもしれない。冒頭に「今月

は私なりによいいと思った句を挙げて見ます」と書いているが、これは「普段なら駄目句も槍玉に挙げるのだが……」、といった含みがありそうである。この句評をいくつか取り上げてみよう。

最初は「付き」がよいという評を受けた句である。

専門は燃焼技術餅を焼く

【句評】：「燃焼技術」と「餅を焼く」の取り合わせは、ややもすると「つき過ぎ」になりやすいのだが、それが感じられないのは切れのよい語法がこれを救っているのだろう。老練の作である。一方、この句では「だから餅を焼くのが上手」なのか、「そのくせ焼き方が下手」なのか両方にとれる。……「燃焼」とは「焼いてしまう」ことでしょう。「だから餅が焦げた」？ この句は「これから餅を焼くところ」、だと考えた方が面白い。

仲良しの象牙の箸や秋に入る 李錦上

【句評】 食欲の秋であること。「仲良しの箸であるからすでにある期間使ってきた愛用の箸だ。象牙は……質が緻密で量感もあり、むしろ宝石に近い。もし作者が老人であれば、何年か前の誕生日に身内の誰かから贈られた箸なのかもしれない。「仲良しの」という身内的な言葉づかいから、この象牙の箸への愛着が感じられ、微笑ましい。……

梅漬けて無敵の母となりにけり 李秀恵

【句評】 梅は果樹だが生食すると美女までが折り畳み式の顔になるほど酸っぱい。通常干したり漬けたりし、広範囲にわたっての民間薬的効能を発揮する。……この句の母には子が何人もいるらしい。よく病気になるらしい。だがもう大丈夫だ。何しろ梅を存分に漬けた。戦いの準備はもう完了だ。さあ、どこからでも攻めてくるがいい。「無敵」とは半分勝っているのである。

菊活ける家元の声慎ましき 游細幼

【句評】「菊」がぴったりと坐る一作。ただし「慎ましい」という抽象語ではなく、写真に撮れるような景、または録音できるような声に改めることができましたら、と思うんですけど<sup>5)</sup>。

昨夜<sup>よ</sup>逝<sup>へ</sup>きし人とは知らず柿土産 黄 葉

【句評】「柿土産」の三字が大活躍している。柿であることから、持って行った人の身柄や生い立ちや日常の起居、相手との間柄、つき合いの程度……などなどが何となくわかるのではないかしらん。もちろんよくはわかりません。……でもそんなことは——主題以外のことはほかしておけばよい。だがすべての辻褄は合っている。これが俳句だろう。

夏木立すつくと大地をわしづかみ 陳蘭美

【句評】すつくとしているのは夏木立です。「すつくとわしづかみ」しているのではありますまい。夏の木は茂ります。若々しく逞しそうです。わしづかみとは根張がよいことの謂でしょう。大地が硬い岩石の山であれば走り根が浮き立っているはずです。力強い句として魅かれましょう。

次の二句の場合は、「はっきり詠みすぎている」ということが指摘されている（下線引用者）。

炎天下車椅子押しデモ行進 林 美

【句評】：短歌調の句ばかりつくりたがる作者の作としては珍しく俳句的な作。短歌は感情によってつくり、俳句は感覚によってつくる。感覚には勘が働くから、もう少しほかしてつくった方が本当はよいと思う。これではこれでもか、これでもか、といった強引さに終始してしまふ。「押し」「行進」を捨て「炎天下」も暑さを暗示する程度の言葉に改められないものか。また「車椅子」も例えば「父の車椅子」などとされると、ぐっと余韻が出てくるはず。

サングラス散歩と言ふに車椅子 陳宝玉

【句評】：一応よろしいでしょう。少しはっきり言いすぎているので余情がなくなっています。もう少しほかすように。それともう一つ、この句ではサングラスと車椅子の二つが両天秤になっていて、主役がわからない。

「短歌は感情を詠むもの、俳句は感覚を詠むもの」と黄靈芝は区別しているのだが、正岡子規は「俳句はおのがまことの感情をあらわすものなり」と言っている<sup>6)</sup>。黄靈芝はどちらの句に対しても、感情を持ち込むことを拒否しているかに見える。「ほかせ」とはどういうことであろうか。上の句に対して、黄靈芝は「車椅子押し」を例えば「父の車椅子」とでもすればいいのではないかと言っている。すると「炎天下父の車椅子デモ行進」になるが、これは「ほかす」（幾分穏やかになる）という効果もあろうが、人物を配することによってむしろイメージを具体的に豊かにする効果があるのではないか。

夢に笑む稚児の眠りや鐘叩 廖運藩

【句評】……「鉦叩」がよく利いている。主題も作風も江戸後期ほどにも古めかしいが整った句ではある。

これらは基本的に納得できる句評であろう。句の性格に従って、自在に目の付け所を替えている。黄靈芝の最盛期の代表的な句評と言ってよいであろう。

#### 4. 2004年5月以降の句評

黄靈芝はその後健康状態が悪かったためか、半年ほど句評を出さなかったが、再開した2004年5月からの句評では、ほとんどの場合、○の句よりもむしろXの句を中心に批評するようになったのが注目される。この半年の間に、黄靈芝の句評に対する姿勢が変わったのであろうか。

句会	○の句	Xの句
2003年10月	26句	0句
2004年5月	11句	8句
2004年6月	10句	9句
2004年7月	6句	13句
2004年8月	4句	9句
2004年9月	7句	9句

2004年10月	6句	6句
2004年11月	4句	11句
2004年12月	12句	4句
2005年1月	8句	10句
2005年2月	11句	10句
2005年3月	8句	16句
2005年4月	○の句かXの句か不明	
2005年5月	句評なし	
2005年6月	8句	16句
2005年7月	10句 (+4句)	24句
2005年8月	11句	20句
2005年9月	3句	11句
2005年10月	9句	3句
2005年11月	句評なし	
2005年12月	10句	43句

その後も、句評での○の句とXの句の割合は、大きく変わっていない。黄靈芝はこのように、○の句よりはXの句を主に論評していることが多い、というより常態になってしまっているといえよう。句会での句評は2003年10月のそのように、ふつう秀句を中心にするものだと思うのだが、明らかに逆になっているのである。しかも評をする句の取り上げ方がかなり恣意的になり、選句表の初めの方（早く投句した人）に偏り、後ろの方は無視される傾向が強くなり、公平性にも問題が出てくるようになった。そのため評をしてほしい人は、なるべく早めに投句するようと呼びかけたこともある。2003年10月句会のように、秀句の全部にふれるようにすれば、こういう問題は生じなかったであろう。

「今月の句について」と名付けられた句評は、俳句の基本も知らない初心者が多かったので始めた、というように、Xの句に対しては、まず作句に関する基本的なことを指摘することが多い。台湾であるだけに、日本語の問題——純正なる日本語へのこだわり——が目につく。これは文法や語彙へのこだわりとなる。そこで句評にもしばしば語法の誤りや不適切さの指摘、さらに季重なりの指摘が出てくる。

ここまでは基本中の基本であるが、さらに進んで語法の巧みさが重視

される。そして「われわれは《文芸家》なのだ」という自覚を持ってと言うのである。実際に句評で指摘されることの一つに、言葉遣いのもつニュアンス、面白さのようなことがある。意味は同じでもちょっとした言い回しの違いでそれが左右されてしまう。短い詩である俳句ではそれが非常に重要になる。その一方で言葉遊び、例えば掛け言葉（駄洒落）のようなものは否定される。また「体言止め」＝「用言（動詞・形容詞）の重用を避けなるべく名詞を使うように」という具体的な指摘もよくされる。これは俳句的表現の根幹にかかわることである。これらの指導言は高度のものではなく、むしろ俳句における基本的な語法の注意である。このような句評はまず妥当なものであろう。

だが、黄靈芝はさらに、「抽象的表現を避ける（ひとりよがり・独断・押しつけの排除）」、「単なる説明・解説を排する（読み手に考えさせること）」、「切れと付き」など、表現についての指摘をしている。ただし、2003年から2006年の句会での句評の実例の検討は、すでに拙論「黄靈芝の俳句観と《台湾俳句》——台北俳句会における俳句指導（句評）を中心に」『成城文藝』第201号、2007年12月の「五 黄靈芝の俳句指導（句評）——俳句の本質の探究の諸相」で行っているため、ここでは省略して、創立四十周年記念句会（2010年12月）と、古志俳句会との合同句会での句評を検討することにしよう。

## 5. 創立四十周年記念句会での句評

創立四十周年記念句会（2010年12月12日）での句評で対象になった句の割合は次のようである。

○ = 7句 X = 25句 △ = 9句（△は○とXの中間と見られる）

やはり圧倒的にXの句の評が多い。出句は欠席投句を含め、55名分165句で、○の句は全部で22句あったのだが、その三分の一しか句評していない。

黄靈芝の句評の変化は、まず俳句の形になっていないような初心者と思われる句を好んで選び、延々と長広舌を振るうようになったことである。03年10月の句評には全く見られなかった、むしろ正反対の傾向である。例えば次のような句に対してである（作者名と句評は省略する）。

さんま焼く伸直りの口実かな  
秋刀魚焼き居候の頬ばむ  
猫の恋目を閉じ屋根裏を見る

Xの句の句評で一番目立ったのは、互選の最高点句「看護師の脈取る指の暖かし」(7点)を、「心象風景としての《暖かし》は、とかく作者の一人よがりになり易いので、作者の主張ばかりが表立ち、読者には証拠が見あたらない。ということを感じさせる好個の一例」と評したことである。これは抽象的表現を避ける、という視点からの句評だが、そういう句が最高点になったのはまことに皮肉である。

黄靈芝が○にした句は、「父よりも長寿を享けて冬帽子」に対し、「《冬帽子》の語が所を得てよく坐っていると思います。父は冬帽子を被るほどの年には至らずに今生を閉じたことがわかる」とか、「月冴えてマンモスの骨歌い出す」に対し、「月下の大地、今は絶滅したマンモスの骨。そういえばその骨(が)歌い出す歌が聞えそうだ」とか、比較的簡潔に賞賛している評が多いが、中には○にしておきながら、好い点を全く指摘しないで、難癖だけつける場合もある。

山羊の声しきりにひびく牧小春 楊海瑞

【句評】山羊の鳴く声は一声をだけ鳴くことは殆んどないから「しきりに」は蛇足でしょう。殊に「牧」「小春」とあれば、その声はかなりに響くことは想像できましようから、細々と喋り過ぎていると私は思いますけれど。……

これではどうして○にしたのかわからない。その点次の句の場合はプラスの評価とマイナスの評価のバランスが取れている。

刈り取りて皴手に重き晩稲かな 廖運藩

【句評】「刈り取りて」なる言葉には、その前にあった丹精の農事があった。それも皴ぶかき労農の日日の戦いがあったわけである。少し丹念に詠みすぎるのが難だと思えますが……

## 6. 『黄靈芝作品集 21・論集「年々…月々…」』に見る月 例句での句評への「加筆」

第四期中期に刊行された、『黄靈芝作品集 21・論集「年々…月々…」』（私家版、2008年12月、以下『作品集21』と略称）は黄靈芝最後の著作である。黄靈芝はこの書の「後記」で、内容についてこう述べている（初めの二ヶ所の括弧内引用者、最後は著者）。

……私は（台北俳句会）発足後の何年かあとから月々「ご参考までに」と題して初歩的ないろいろを書くことをはじめ、後「今月の句」として今もって月々批評めいたものを書いている。（中略）

以上のようなもろもろを引っくるめて、そのうちの民国九十四年（二〇〇五）の分を冊として纏めてみました。私たち台北俳句会の歴史の一齣であり、同時に私の俳句論でもあります。

（過去に書いた文章を読み返すと、到るところに不手際な説法や誤りや何やのあるのが普通であり、……この文章にはかなりの加筆をしております）。

要は2005年度の句会に出された句についての、句会報での批評に「大幅に加筆した」ものだということであるが、実はこの加筆が問題である。月報の句評は比較的短く（かなり長いものもあるが）、句の問題点を簡潔に指摘していることが多いのに対し、『作品集 21』では、批評の要点が曖昧になり、わからなくなってしまう場合が多い。二三例を挙げよう（作者名は省略する）。

例1：足音に慌てて動く穴惑ひ

【句評】(X)：面白い情景だと思いますが、「慌てて」という作者の独断ではなく（抽象語でもあり、これを止めて）、たとえば「左へ右へ」などと実景描写にして欲しいけど…（具体的に）

【作品集21】：「穴惑ひ」とは冬眠をはじめるべえか、もうちょっと先にするかと迷う冬眠族——蛇や蛙、蜥蜴——の生きざまの一齣である。冬眠を控えての未練がましい一景だ。何せ、娑婆は暖かい限りは餌が



多く、ここを離れるのには後髪が引かれた。そんな多分、蛇やら蜥蜴やらのうやむやの屯ろの庭なり里なりに突然足音が聞えたため、者共、忽ち正気に返り、蠢き出すや逃げ、よってお人、足許から湧いた仰天により悲鳴が天に轟いた。この仰天のさまを詠んで頂きたいのです。(その方が陳腐でないから)。お作の「足音に慌てて動く」とは言わずもがな、「慌てて逃ぐる地震かな」でも同じ。まどろっこしいし、また当然でしかない。もちろん地震でも結構ですが、「妊婦の逃ぐる穴惑ひ」などでは如何? 情景が違うけど。作品とは手品と同じでちょっと思いがけないものでないと面白くないのです。また原因と結果のとり合せは解説の仕儀にほかならず、詩の方法ではないだろう。

「句評」は簡潔に「右に左に」と具体的に添削すべき問題点を示しているのに、『作品集 21』では、長々と(いわなくてもわかるような)情景の解説をしており、肝心の句をどのように改めたらいいのかが分らなくなっている。「足音に慌てて動く」が「言わずもがな」という指摘はいいが、その改め方は完全に脱線しており、作者は戸惑ったに違いない。

#### 例2：天界に吾子待ち居るよ穴惑ひ

【句評】(○)：穴惑を老人の処境に譬えた作では、この句がいちばんよいと思います。この世への未練も必ずやあるはずであるのと同時に吾児にも会いたいという心はずみもあるわけで、一読しんみりさせられます。

【作品集21】：天界に亡くなったお子さんがいらっしゃるのだろう。そして母さん(多分)が来るのを待っている。そうと知りながらも、こうして私はこの世とあの世の堺で、まるで蛇や蜥蜴が穴惑いをするようにうろろしている。いうなれば「穴惑ひ」に身を譬えているのである。この種の譬えは——突拍子もない譬えであれば満場の拍手をも得よう。右手が左手を叩き、左手が右手を叩き、とうとうちらとも玩具のように壊れてしまった…。ありふれた譬えでは、むしろ真妙に「人の穴惑ひ」とされた方が潔いだろう。

月例会報の句評では○の句として称賛されているのに、「作品集21」

では、情景の解説はそのとおりだろうが、句の評価が逆転して、あたかも欠陥句のように扱われている点が注目される。

### 例3：冬晴れの観音山を鳶一つ

【句評】(○)：一読それがどうかしたかしらん、とあっていまい。いわゆる「ただ事うた」だと思ってしまうのです。その実、「炉火純正」という言葉があります。かの岳飛の言うならく「三十功名塵与土八千里路雲和月」の境地に多分あるらしい作者（むろん誰でも結構ですが）その境地の作として、「観音様の名をもつ観音山はただの山ではありますまい」「冬晴れとは晴ではあっても《冬の晴》であること」、などなどの噛み合わせの妙を、この句はもっていそうに私には思われるのですが…いいかえれば古典的一首。

【作品集 21】：(イ) 観音山は台湾北部、所轄台湾県の秀麗な山。昔の日本人はこれを台湾富士と称した。ある角度から見ると寝釈迦の姿または寝顔に見えた。古来名山とされる。火山系の大屯山彙のうちの一山。寺廟、墓地の地でもある。

一方鳶は日本ではタカ科（台湾ではワシタカ科とよぶ）猛禽の一で、猛禽とは常に肉食、ギロチンを背負って大空を舞い、眼はきよろきよろ。嘴も蹴爪も——鉤型とは凶器であった。その食ったりし——吐き出した暖気<sup>おくび</sup>までが血塗れだというのに、悠々と仏の住み給う観音山の上空を舞っているわけだ。そんな鳶、そんな観音山、そしてそんな冬晴の一景。それを淡々と描いているところがよい。名言を吐こうとしていない作者の姿勢がこよない。

(ロ)「観音山に」ではなく「観音山を」とあるその相違をご存知だろうか。「に」の場合は単なる景の描写であり、「を」だと主観が混じるのである。観音山にまつわる人文や歴史を踏まえての「を」なのだ。はて、どちらがよかったのだろう。

「冬晴れの……」の句は、比較的句の評価が変らなかった例だろう。加筆もそれほど長くない。このような例もあるが、全体としてみると、会報の句評では、「指導」の意味が比較的分かるようになっているのに対し、『作品集 21』では自分の俳句論に酔ってしまい、その句をどうしたらいいのか、曖昧になってしまっていることが多い。ある意味で台北

俳句会第四期を代表する黄靈芝の俳句論なのだが、内容紹介はこれだけに留めたい。

## 7. 台北俳句会と古志俳句会との合同句会

台北俳句会が、日本からの訪問者と合同句会を催すことは少なくないが、2013年2月3日に行われた、長谷川權率いる古志俳句会との合同句会は、成熟期から転換期への移行を記念する句会となったといえよう。この合同句会は、長谷川前主宰ほか古志俳句会側6名、稲門連句会員1名に朝日新聞記者1名と、欠席投句を含む計50名で行われた<sup>7)</sup>。

この句会で黄靈芝と長谷川權が秀句としたのはつぎのようである（互選の得点には黄靈芝・長谷川權の点を含まない。黄靈芝の選は一月遅れて3月の会報の句評に発表）。

黄靈芝選	作者	互選得点
トーストの朝の弾力寒波来ぬ	高淑慎	3点
口下手のその親しさの煮大根	林美華	3点
真白な翼ひろげて寒波来	長谷川權	4点
寒紅を買うて一輪花買うて	趙榮順	1点
「おかえり」はいつも日本語大根煮る	三宅節子	5点
佳作：大根の古漬け名人それは我	李秀恵	0点
佳作：大根にどの殿方か足つけて	李淑女	0点

### 長谷川權選（括弧内は長谷川の句評）

大根の古漬け名人それは我	李秀恵	0点
（それは我と言いつる遠慮のなさ！がよい）		
もう米寿まだ米寿だよ大根干す	高淑慎	1点
（まだ米寿と語れる元気、おおらかさ）		
夕暮れの屋根より匂ふ干大根	高阿香	3点
（干大根の匂いが流れてくる景色と時間が浮かぶ）		
鱈大根鍋いっぱい母心	西本綾乃	2点
（鍋いっぱいと言った後の母心が味わい深い）		
老猫の寝息の太し大根煮ゆ	藤原若菜	4点

(猫の大きな躰と大根が煮えている取り合わせがよい)

選を発表する時に長谷川はこういったという。「俳句で大事なことは、言葉をはっきり述べることです。台湾の人の句は、人間中心の句が多く、しかも遠慮せずものを言うところに人間味が出て面白い」と<sup>8)</sup>。

この合同句会での長谷川の印象を、後に新聞記事はこう伝えている<sup>9)</sup>。

台湾の俳句の特徴は、長谷川が特選にした「大根の古漬け名人それは我」(李秀恵)に顕著だという。「《名人それは我》と日本人には言い切れない。思い切りの良さがいい。人間味があり、物事をおおらかにとらえ、本質をはっきり言う」

一方黄靈芝と長谷川が出した句の互選での得点は次のようである<sup>10)</sup>。

更地とて囲へば畑大根植う	黄靈芝	1点
空港に隣る分店北京鴨 (ペキングモ)		0点
焼芋の甕ほかほかと二度おぼこ		0点
幸さながら一本の大根あり	長谷川權	2点
真白な翼ひろげて寒波來		4点
煩惱の蛇ぬくぬくと冬ごもり		4点

長谷川が特選にした「大根の古漬け名人それは我」は、黄靈芝も特選にはしなかったが、「佳作」にしているから一応評価に大きな対立はない。しかし「もう米寿まだ米寿だよ大根干す」は、二人の評価が正面から対立している。黄靈芝はこの句を「《大根干す》でなく《麦を刈る》でも《鯨釣る》でも主題は同じである。報告はつまらない」と切り捨てたのである。

また長谷川がこの句会に出した「真白な翼ひろげて寒波來」と「煩惱の蛇ぬくぬくと冬ごもり」に対して、黄靈芝は正反対の評をしている。前の句に対しては「老練の作といえよう」と称賛している。一方後の句に対しては「…私の年来の主張として作者のいう《ぬくぬく》とは作者の一方的な主張であり、他者を納得させる具体的な証拠を欠く。如上の

作者の主張は読者をぎゃふんと参らせないと思うのです。作者の主張でなく証拠が欲しい」というのである。だが互選ではどちらの句も4点ずつ取っている。黄靈芝の句は、出された3句のうち1句に1点入っただけである。

類似の句評は、既に見たように、創立四十周年記念句会に出された、「看護師の脈取る指の暖かし」にもなされている。この句は互選で7点と最高点になったが、黄靈芝は〇にしなかったばかりか、「心象風景としての《暖かし》は、とかく作者の一人よがりになり易いので、作者の主張ばかりが表立ち、読者には証拠が見あたらない」と同じような評をしたのである。

この問題にどう決着を付けたらいいのか、筆者は判断を保留したい。だが、句全体から特定の語句を切り離して、言葉そのものを否定することに問題がある、という捉え方をするのならば、長谷川權はこう言っている<sup>11)</sup>。

俳句では、しばしば「この言葉を使ってはいけない」などという人がいるが、俳句に使ってならない言葉はない。……むしろ、どんな言葉でも使いこなせなければならない。「使っていけない」というのは、その人が使いこなせないだけなのだ。

古志俳句会との合同句会は、翌2014年10月にも行われているが、この時は長谷川夫妻と古志の会員2名の参加だった。この句会での「宿題」は「豊年祭・白帯魚・菰菜花・当期自由題」であったが、この時は幸いにして、このような問題もなく、互選での二人の「主宰」の得点も、ほぼ互角であった。

世が世なら長（おさ）の一声豊年祭	黄靈芝	3点
そよ風の菰の我が家にもどりけり		3点
明治四年清髪廢刀令発布のみぎり太刀魚はどうしたか		0点
名刀のごとく太刀魚ならびけり	長谷川權	4点
台風のあと大揺れや太平洋		0点
秋白き花蓮の浜を見にゆかん		3点

## 8. 第四期（成熟期）から第五期（転換期）へ ——黄靈芝なき台北俳句会

2016年3月12日、創立以来46年近くに亘り、一貫して台北俳句会の会長を務めてきた黄靈芝が逝去した。行年87歳であった。台北俳句会の長老の一人である黄葉は、「うたをよむ 黄靈芝さんをしのんで」と題した追悼文で、「私たちは今なお、先生が陽明山の山荘に居られるような気がしています。……先生の遺句の選をしておりますと、その句ではないよ、というお声が聞えそうです」と言いながら、次の7句を選んでいる<sup>12)</sup>。

手に蟬を握るは命握りけり  
じゃが芋に目鼻のありき夜の厨  
深梅雨の山に去ぬれば遠流とも  
秋茄子は大吟醸酒もて酔ふと  
廳一夜明けて犬猫別れけり  
殿は母子かと見えて雁渡る  
木には木の裸を急ぐ冬支度

「句の鑑賞をそえなくても一読理解できる句ばかりです。ひねった句を作っておられたのは作句生活の前半であって、やがて核心に迫る句を何気なく詠まれています」と黄葉はいう。なお、これらの句は『台北俳句集』第29集（2002年）～第39集（2012年）と、2012年末の句会に出された句から選ばれており、第五期に詠まれた句はない。

拙論は台北俳句会の歴史を一貫して会長・黄靈芝との関係で見えて来たので、黄靈芝の逝去をもってこの小史の結びにしたいが、黄靈芝と一体化していた俳句会が、黄靈芝の手を離れることによって生じた変化を簡単にしておきたい。

実は黄靈芝の逝去のかなり前から、台北俳句会にはいくつかの変化が起こっていた。言い換えれば、黄靈芝なりの「運営」と「指導」があった時期から、それがなくなる時期への転換である。第五期を転換期と名付けるゆえんである。

## 8 - (1) 句会会報発行方式の変化——黄靈芝による選句の欠落

2013年度から句会の運営方式が大きく変る。これは前年5月に、黄靈芝が負傷したことによって、それまでも句会に殆んど出席していなかった会長・黄靈芝の健康がいよいよ悪化したため、第四期の末までずっと続けてきた黄靈芝の手書きの会報と句評に、まず変化が現れる。2013年1月から、毎月の会報が、若手会員によるPCで編集されたPDF版に変わり、句評のみ黄靈芝の手書きのまま印刷したものが、一か月遅れで添えられることになった。これに伴い、それまで「5～3句」だった毎月の投句が、一律3句となり、その結果黄靈芝による第一段階の選句がなくなったのである<sup>13)</sup>。また投句一覧表で秀句に○を付することを止め、句評の後に別記する方式に替わった（ただし選ぶ句の数がかなり減った）。しかし間もなく句評は休載されることが多くなり、互選の結果のみが会報に表示されるようになった。それまでは句会での会長入選句（○の句）の選句と合わせて、二重の選句過程があった。それがなくなって、月例会句会は一律に3句投句して互選するだけの場になったのである。

## 8 - (2) 黄靈芝の投句と句評の休載と台北俳句会の運営体制

それまではほぼ毎月会報に付されていた黄靈芝の句評は、2013年1月以降、一応2回だけ一月遅れで出されが、2013年4月から当分休載となり、毎月の会報に「今月の句評一回休み、どうかご了承ください」という掲示が出されていた。一時復活したこともあったが、2015年以降はほぼ姿を消した。同時に黄靈芝は毎月の句会に休詠することも多くなる。既に古志との合同句会の翌々月、2013年4月から10月まで、及び12月と8回休詠したのを皮切りに、2014年も2・3月に5～8月と6回休詠、2015年は3・9・10・12月と4回休詠、以後2016年3月の逝去まで休詠となる。台北俳句会は会長も他の会員と平等に3句しか出句しないのに、第五期の黄靈芝はほぼ二回に一回月例会句会に投句していないのである。

つまり第五期の台北俳句会は、黄靈芝による選句と句評と投句の三つがなくなって行く過程であった。しかも黄靈芝の後継者と目される俳人がいない、会長＝主宰不在の句会になったのである。これは台北俳句会

にとって大きな転換であった。黄靈芝が亡くなったのは2016年の3月だが、そのかなり前から「運営委員会」体制を取っていた。黄靈芝の逝去に際しても「会長の偉大な業績を偲びつつ、今後も次期会長を立てず、『運営委員会』の体制で当会を継続させていきたい所存です」と、2016年5月の「台北俳句会会報」は述べている。黄靈芝が会長としての役割を果たせず、運営委員会が肩代わりしていく過程が、2013年以降の台北俳句会を「転換期」とする内実でもある。

『台北俳句集』の刊行の仕方も、第五期はそれまでと異なっている。まだ黄靈芝の存命中ではあったが、第41集～43集が丸3年遅れて2015年7月に一斉に発行されたのも、こうした状況が生み出したものである。第44集は黄靈芝の没後、2017年2月に単独で刊行されたが、第45・46集は2018年に再びまとめて刊行されることになっている。

#### 8 - (3) 『台湾俳句歳時記』季語の兼題の増加・定例化

もう一つ重要なことは、成熟期になると減少していた台湾季語句の宿題（兼題）が、転換期に再び増加するようになったことである。第五期に入っても、宿題（兼題）は概ねそれまでと同じで、主として日本の歳時記の季語、たまに台湾季語が一題入る程度で、全部「当季自由題」ということもあった。2013年2月に長谷川權の一行が参加して合同句会が行われた時の兼題も、「寒波・大根・当期自由題」であった。それが2013年9月から、台湾季語が毎月一題ずつ入り、同時に『台湾俳句歳時記』の解説のコピーが添えられるようになった。2014年7月以降はこれが2題になり、プラス「当季自由題」ということになって、以後この形式がずっと続いている。これも第五期の転換の一つである。

#### おわりに 台湾俳句をどうとらえるか

黄靈芝はかつてこんな句評をしたことがある。「八十五歳一月一日の暦剥ぐ（2005年1月）」という句に対して、「なぜ八十五歳であり、八十六歳でなかったのか、という問題です。だって真実に八十五歳だったのですもの、という答えはひとりよがりのほかに、他人にはそのこよなさが伝わりません。ここに文芸のあり方の問題が存しましょう。……《人生のための作者一個人の文芸》であるべきか、《芸術のための文芸》



であるべきか、の問題です。もちろん、どちらにもどちらの言い分があり、よさがあるのですが、自分のための文芸であるのなら、別段発表するには及ばないとも言えましょう」と（下線引用者）。

だが黄靈芝も俳句（だけでなく創作は）すべて自分のためだけのものだと言ったことがある<sup>14)</sup>。

私は日本語で考え、学び、創作してきた。……私は多分、今後も日本語での創作を続けるだろう。誰のためでもなく、ただ自分の為だけに。（下線は引用者）。

黄靈芝は自分のためにだけ詠むと言っているのだが、その点は他の台北俳句会員の場合も同じだとは思わなかったのだろうか。黄靈芝が影響を受けたと思われる、正岡子規はこう言っている<sup>15)</sup>。

俳句はただ己れに面白からんようにものすべし、己れに面白からずとも人に面白かれと思うは宗匠門下の景物連<sup>けいぶつ</sup>の心がけなり。

また黄靈芝自身もかつて、『台北俳句集』の第4集（1975年）の「はじめに」で、「句に限らず創作する場合には、知らず知らずのうちに読者を念頭に浮かべることが多いが、読者よりも己を欺かざることが大切であろう」と、やはり子規に通じるようなことを言っていたのである。だが次の第5集（1976年）の「はじめに」では、会員の句に対して「いささかマンネリズムの危険を覚える……語呂に甘えただけでは詩にならない」と、逆に「詩人」の立場から批判している。「自分のための文芸」か「芸術のための文芸」か、ということは、黄靈芝自身にも迷いがあったのではなかろうか。

『台湾俳句歳時記』の口絵写真を担当した、カメラマンの村田倫也は、第三期の終りに近いころ黄靈芝と出会い、それから台湾風物詩を主題にした写真を撮り始めたという。自身も川柳人である村田が何よりも驚いたのは、自分より正確な日本語を語り、短歌、俳句、川柳を作る台湾の人たちがいることを知ったことだったが、その時黄靈芝はこう語ったという<sup>16)</sup>。

台湾の俳句はレベルが低いのです。日本語ができることに甘えています。はっきりいわないと相手に通じないと思っているのです。私をこれを見て感動しましたから信じてくださいと連呼しているようなものです。そこまで言うては駄目だと口を酸っぱくして言うのですが解らない。まあ、仕方がないでしょう。

これは「芸術のための文芸（俳句）」という立場からの発言であろう。だが長谷川權は台湾人の俳句を、「思い切りの良さがいい。人間味があり、物事をおおらかにとらえ、本質をはっきり言う」と捉えているのである。台湾の俳人たちは、自分のための俳句だからこそ、そのように「おおらかに……はっきり」と詠んでいるのだ、と考えられないだろうか。

さらに、黄靈芝は「台湾の俳句はレベルが低い」というが、台北俳句会にも、初心者から、日本の俳句結社の同人になって数十年も経っている人、日本の俳誌や新聞などの俳壇に毎月投句して入選している人など、多様な俳人がある。一口に「台湾の俳句は」と言ってしまうのであろう。この現象をどう捉えたらよいだろうか。

台湾の短歌について、大岡信は「どちらが進んでいる、どちらが遅れている、といった程度の比較論を離れて見れば——これが詩歌作品を鑑賞する上でまず大前提でなければならない——『台湾万葉集』の歌は、実に面白いものが多い。人生が、ここでは何と生き生きと詠われていることだろう。／総じて、台湾短歌には、短歌形式に遊ぶ楽しさがあり、機智、諧謔があり、皮肉な眼差しがある」と言ったことがある<sup>17)</sup>。また向井敏は、「(台湾短歌の) 何にもまして得難い美質は、明るくて乾いたユーモアに富んでいることである。題材がどんなに深刻でも、歌いぶりには何か悠々としたところがある。暗を明に転じる、おおらかな笑いがある」と言っている<sup>18)</sup>。

これに通ずるような特質が台湾俳句にもあるのではなかろうか。かつて、片川進は「俳句の国際化」の中で「形容詞や副詞が氾濫する台湾俳句には、感情露出のものが多く、別な進化ともいえる」と述べているという<sup>19)</sup>。これはこのような「感情露出」の傾向を、とかく「侘び」「寂び」的なものを尊重しがちな日本の俳句とは相対的に独立した、台湾俳句の特性として認めようとしているように受け取れる。これは大岡信や

向井敏のいう『台湾万葉集』の評価にもつながるものではないかと思われる。率直に感情を表現するところが台湾的な特徴なのだということである。

だが黄靈芝は、台湾季語句にも甘くなかったが、句想や句法についても、台湾的と見られそうな特性に対して厳しい見方をしていた。

黄靈芝の俳句の特質の一つは諧謔性に富むことであるが、それはむしろ表面的なことであって、彼の俳句観の中核をなすモチーフは、「孤独と死」のような普遍的な課題ではなかったか。黄靈芝は虚弱な体質と病気による生命的な死と、戦後の台湾における日本語による創作という特殊性から作品に対する反応がないという社会的な孤立に長い間苦悩した。それにいたいする回答が自己自身を最良の読者とする制作であった。彼の作品に見られる強烈な風刺や自己主張もそれに基づくと思われる。このような立場からは、自分に受け入れられることがすべてなのだ。だがそれは主観をそのまま出すことでも自分に甘えることでもなく、自分という他人を納得させうるものでなくてはならない。そこには寸分の妥協もない。本来俳句は「作者即読者」の文芸である。その点でも俳句は黄靈芝にとって最もふさわしい文芸であり、生涯の最後が「俳句の時代」であったのは、必然的な帰結であったとも言えよう。だがそのような黄靈芝の思想が容易に周囲に伝わらなかったことも事実であろう。

晩年の黄靈芝はこう言っていた。「(選句をする時)私の標準は詩趣の有無を第一に置く。詩がなければ、わざわざそれを作に仕立てる苦勞をするに及ばないからです。後は芸の高下を問うことになります。そして究極的には新鮮な話題を巧妙な語り口で、ということになります」(2012年9月会報)。これは一見平易な表現だが、その背後には『蟬三〇〇句』に至るまでのような苦闘があったことを見逃がすことはできない。

いずれにせよ、戦後台湾の俳句は、日本語を「道具」として用いながらも、「台湾俳句」を目指す方向(脱日本俳句の方向)と、それを超えて近代詩としての普遍性を目指す方向という、二つの視点からとらえる必要があるように思われる。現在台湾には短歌・俳句・川柳の三つの日本語短詩文芸の団体があるが、人員の面でも組織的にも、台湾人が一番中心になっているのは俳句であると言えよう。2020年7月、台北俳句会は創立五十周年を迎える。転換期の台湾俳句が、迷うことなく「おおらかに、はっきりと」歩みを進めていくことを期待したい。(完)

【あとがき】本シリーズは当初（八）までを予定していたが、筆者の関西への転居などの事情もあり、ひとまず今回で終了することにしたい。そのため「戦後の台湾俳句と台湾ナショナリズム」「ポストコロナル現象としての戦後台湾における日本語文藝」などの問題には触れられなかった。ただし、これらの点について、筆者は以下の拙論で論及したことがある。

磯田一雄「台湾における日本語文藝活動の過去・現在・未来」『成城文藝』第197号、2006年12月

磯田一雄「植民地台湾における日本語短詩文芸と国語教育」『植民地期東アジアの近代化と教育—1930年代～1950年代』独立行政法人日本学術振興会平成18～20年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書（研究代表者 磯田一雄）2009年3月

## 註

- 1) 『岩戸』2004年5月号。
- 2) 磯田一雄「戦後台湾俳句小史（四）」『成城文藝』第242号、138頁、141頁及び145頁。
- 3) 『黄靈芝作品集 18』私家版、2000年12月、「あとがき」。
- 4) この句は2013年2月の古志俳句会との合同句会の折、同じ作者・李秀恵が詠んで、長谷川權が特選にした「大根の古漬け名人それは我」を思わせるものがある。
- 5) この句と似たような例として、2004年12月句会での○の句「念入りにメモを確かめ十二月」に対して、「……《十二月》なる季語がよく利いていると思う。ただ私流に言えば《念入りに》は抽象語であり、具体性がないから（一人よがりの言葉）少し改めて、たとえば《二度三度》とでもしたいところ」という句評がある。いずれも「慎ましき」「念入りに」のような形容詞や副詞が出てくる。これらは「抽象語」であり「具体性」に乏しい、つまり主観的あるから、（一応○にした句であっても）「写真に撮れるような」客観的な事象に改めたいというのである。だが、子規は「俳句の種類」として、「意匠に主観的なるあり客観的なるあり、主観的とは心中の状況を詠じ客観的とは心象に写り来りし客観的の事象をそのままに詠ずるなり」と言っている。そしてその間に優劣の違いはないと言っている。（正岡子規『俳諧大要』第三、坪内稔典編『子規選集⑥、子規の俳句革新』増進会出版社、2002年、087頁、現代仮名採用。以下子規の引用は同書による）。
- 6) 正岡子規『俳諧反故籠』、前掲『子規選集⑥、子規の俳句革新』162頁。

- 7) 長谷川權は既に2011年に黄靈芝を訪れていた。彼は『台湾俳句歳時記』の紹介とともに、「もう一つは人間への愛といおうか、台湾風のおおらかな包容力だろう。これがときに笑いとなり涙ともなる」といって、次のような句を例に挙げている。(長谷川權「海の細道」53「日本語で詠む人間愛・台湾の俳句」、『読売新聞』2011年12月3日)

春耕や野良に現役の古希傘寿	廖運藩
炎熱に耐へて大樹は人庇ふ	高阿香
どの蟬も枝に命中して止る	黄靈芝
籐椅子に目つむり遠き戒厳令	黄葉
大根市赤子も横に並べられ	北条千鶴子
忘年会流れて口惜し独り酒	涂世俊

- 8) 台北俳句会の2013年5月の会報による。
- 9) 「台湾俳句おおらかにはっきりと 長谷川權、現地で合同句会」『朝日新聞』2013年2月12日夕刊。
- 10) ある会員によれば、この句会の席上で長谷川はこう云ったそうである。「句会とは選句をする場だ。だが互選ほど当てにならないものはない」と。これは互選の結果が黄靈芝と長谷川權とで、あまりに対照的だったからかもしれない。
- 11) 長谷川權『一億人の俳句入門』講談社、2005年、205頁。
- 12) 『朝日新聞』2016年5月9日付、「台北俳句会会報」同年5月に転載。
- 13) 黄靈芝はまず2012年10月の会報で「本年の十二月まで私が「代表」の職を務めますが、来年一月から誰方かにバトンをお渡ししたいと存じます。よろしく願いいたします」と訴えている。だが実際に会長職を替わる人はいなかった。具体的に重要なのは、十二月の会報末尾の「私の目がひんがら目になったので、来年一月より句会への投句は涂世俊さんへお送りください。涂さんがプリントを作ってくださいます。…」というお知らせである。毎月の句会への投句先と会報の作成を涂世俊に委ねたのである(その後、涂世俊は杜青春という俳号を名乗るようになる)。
- 14) 「俳句に託す台湾の心」『日本経済新聞』「文化」欄、2005年、月日不明。
- 15) 正岡子規『俳諧大要』(明治二十八年)、前掲『子規選集⑥、子規の俳句革新』099頁。
- 16) 村田倫也「台湾風物詩」『燕巢』2004年3月号。
- 17) 大岡信「序文」『台湾万葉集』集英社、1994年、5頁。
- 18) 『台湾万葉集・続編』集英社、1995年、「解説」16-17頁。
- 19) 岡崎郁子『黄靈芝物語——ある日文台湾作家の軌跡』研文出版、2004年、205頁。